



学校法人
鎌倉女子大学

生き生きとした精神に -DEM LEBENDIGEN GEIST-

開けた山間^{やまあい}の下にはラインの支流のネッカーが流れ、左右に広がる山腹^{さんぶく}には「哲学者の道」と名づけられた散歩道と、往昔^{おうせき}の戦禍^{いくた}で傷んだ古城が向き合うハイデルベルクは、ヨーロッパ屈指の観光名所であり、またドイツ最古の大学街としても知られています。

その中心地の「大学広場」に面した白亜の講義館の正面外壁には、「生き生きとした精神に」という銘文が掲げられています。大学は生き生きとした精神によって担われるもの、大学は生き生きとした精神に協賛するものといった意図でしょうか。

その講義館で、先の大戦直後の1946年1月、物心共に荒れ果てた祖国と大学の復興を願い、当代を代表する碩学^{せきがく}であったカール・ヤスパースが「大学の生き生きとした精神について」という講演を行ったことがありました。その中に、独り立ちした研究者にも、就学^{しゅうがく}途上^{とじょう}の学生にもよい示唆を与えてくれる文章があり、一部ここに紹介するのも意味があるうと思った次第です。

「自然科学も、決して知覚や知性だけで発達するわけではありません。その本質は、精神科学の本質同様、精神的なものです。自然の勢力や威力に対する研究者の本能や空想的な洞察が、さながら自然科学においても、隠されていた予知を可能にするのですし、これまで顧みられなかったことを注視すること、また発見することへと導くのです。それ故、全ての学問にあって大切なことは、人間の魂であり、人間の感受性であり、そこからさまざまな経験が生まれてくる静寂の中で人間が耳を澄ますことなのです。

社会科学にあっても、研究者にとって奇妙に落ち着かない状態は、むしろ認識^{ぼつたん}の発端です。力を発揮することの出来なかった行為者は、政治的活動の最も善き認識者となります。マキャヴェリは、彼が政治的現実から遠ざけられた時、彼の最も深い学問的洞察を見出したのですし、自分の著作を初めて物にすることが出来ました。マックス・ウェーバーは、政治的な実際活動が自分の思いのままにいかなくなったが故に、前人未踏^{つらぬ}の深く貫き通した彼の社会学的な認識を展開することが出来ました。それ故、人間的に生きる真面目さが有意義な勉学の条件^{*}なのです。

古代ギリシアのプラトンとアリストテレスの師弟も、学問は「驚き」から始まるといいましたし、20世紀の哲学を牽引^{けんいん}したハイデッガーも、本当の事を掴まえようとする心の源泉を「不安」、つまり何処からか襲ってくる奇妙に落ち着かない気分の中に見出しました。驚異にしる、不安にしる、子どものように、世界の不思議さを身震い^{みふる}しながら受け止める心の

動きであり、あっさりいってしまえば、知性よりも、むしろ感性に生まれるものです。それは、知的な営みに過剰に傾く近代人のデカルトの「懐疑」やカントの「批判」の態度よりも人間にとって奥の深いものかも知れません。精神科学のみならず、社会科学だって、自然科学だって、こうした豊かな感受性から生き生きとした活力を得て、それによって当該の学問の知的な観察や認識もまた推進されていくのです。

ブライス卿は、名著『近代民主政治』の中で「学問知識に優れていても、政治に於て賢者智者たる事は困難である。 —中略— 実践は知識に生氣を与へる^{※※}」といいましたし、古い中国の禅の教えの中にも「香巖擊竹^{きやうげんげきちく}」という逸話がありました。博識ではあるが、なかなか悟りが開けない香巖という禅僧がいつものように^{ほうき}箒で道を掃いていた時、小石が跳ねて、向こうの竹にカーンと当たった、その瞬間、豁然として悟りを得たといった故事だそうです。道元^{どうげん}禅師の『正法眼蔵^{しょうぼうげんぞう}』の中でも触れられる挿話ですが、生きる真面目さの中から、ある日ふと気づきの瞬間が訪れ、ハッと視界が開けることは、こうして学問の世界にもあるように思います。

※訳文には、紙幅の制約や表現の補強から、若干の言葉の付加や割愛等、作為したところがある。全文は、雑誌『理想』（第706号／2021年9月発行）に掲載。

※※ブライス著『近代民主政治』松山武訳、岩波書店。訳文の旧仮名遣いは、そのまま尊重した。

[>前のページへ戻る](#)